

# ディック・ターピン伝

南井正廣

## I はじめに

18世紀のイギリスで名を馳せた悪党を3人あげるように言われたら、故買のシンジケートを経営し、自ら「泥棒捕り長官 (Thief-taker General)」を名乗ったジョナサン・ワイルド (Jonathan Wild) や脱獄の名人ジャック・シェパード (Jack Sheppard) と共に、間違いなく、追剥ぎディック・ターピン (Dick Turpin) の名があげられることであろう。しかし、ターピンに関する伝記的な事実をたどって行くことは意外と難しい。というのは、ターピンの生涯に関する情報を入手できるチャンネルが限られている上に、そこで得られる情報が必ずしも正確でないからだ。

今日、日本の読者がターピンに関する伝記的事実を知ろうとする場合、まず最初に参照してみるのが、『イギリス人名辞典』( *Dictionary of National Biography* ) であろう。もう少しリサーチ力のある人なら、「ニューゲート・カレンダー」(イギリス版犯科帳) 類や19世紀の「チャップブック」にも手を広げて調べてみるかもしれない。が、いずれのソースから得られる情報もあまり大差はない。なぜならば、ターピンの処刑 (1739年4月) 直後に出版された『悪名高き追剥ぎ、リチャード・ターピンの公判録』( *The Trial of the Notorious Highwayman: Richard Turpin* ) 中の「リチャード・ターピンの生涯」という18ページからなる記事と、7ページからなる「ターピン逮捕の経緯」という記事がすべての種本になっているからだ。後者は、ヨーク州イースト・ライディング地区の治安書記ロバート・アップルトン (Robert Appleton) が口述したものだから、まだ信憑性があると言える。一方、前者はエピングの森 (ターピンやその相棒キングが隠れ潜んでいた洞窟のあった

場所)近くでパブを営んでいたリチャード・ベイズ(Richard Bayes)が口述した伝記で、当時ターピンとベイズが置かれていた関係を知ると、信頼性に欠ける気がする。後述するように、このベイズのせいで、ターピンは相棒を失い自らも逮捕寸前まで追い込まれたのであるから、両者は敵対関係にあったと言った方がよい。ターピンにとってベイズは憎むべき復讐の対象であつたろうし、ベイズの方もターピンからの復讐を恐れて気の休まる間もなかったであろう。このような敵対関係の一方の当事者が、仇敵の処刑後に短期間で資料を集め、口述してできたのが1739年のベイズの伝記であるとするならば、客観性、正確さに難があるのは否めない。ターピンが処刑されて、もはや復讐される恐れもなくなったベイズが、自分に都合の悪い情報はすべて隠蔽し、一方的にターピンの悪行のみを書き立てていても不思議ではないからだ。残念ながら、トマス・セコム(Thomas Seccomb)が項目執筆した(標準とされる)『イギリス人名辞典』の記述もアッシュとデイ(Arty Ash & Julius E. Day)が共同執筆した伝記『不滅のターピン』(*Immortal Turpin*) 同時代の新聞からの引用が大幅に増えてはいるが、もベイズの影響から完全に脱しているとは言えない。したがって、ここでは、ターピンに関する当時の新聞記事や判例記録などを徹底的に精査したデリック・パーロウ(Derek Barlow)の『ディック・ターピンとグレゴリー・ギャング』(*Dick Turpin and Gregory Gang*)を参考にしながら、今日ではほぼ伝説化している有名なエピソードの真偽も随時盛り込んで、<sup>1</sup> 伝記資料の少ないターピンの実像に可能な限り迫ってみたい。

## II. 生い立ちからグレゴリー・ギャングの壊滅まで

教区教会の洗礼記録によると、ディック・ターピンことリチャード・ターピンは、イギリス、エセックス州のヘムステッド(Hempstead)で、1705年9月21日に父ジョン・ターピンと母エリザベス・メアリー・ターピン(旧姓はパーミンター[Parminter])の三男として生まれた。父は「ベル」という名の宿屋を営んでいたらしい。『イギリス人名辞典』に代表される定説に従うと、ロンドンのホワイトチャペル地区の肉屋での徒弟修業を経た後、肉屋として独立を果たすも、近隣の農家から牛を盗んで販売していたことが判明し、

逃走を余儀なくされ、エセックス州の海岸地方で密輸団に加わったことになっている。しかしながら、バーロウの研究によると、ターピンには徒弟奉公をした形跡はなく、1733年の夏ごろまでエセックス州のバックハースト・ヒル（Buckhurst Hill）で肉屋を営み、密猟者たちから鹿肉などを仕入れていたようである（Barlow, 6-11）。その後、何らかの事情（おそらく故買が発覚したせい）で、パブの主人におさまったことが、ターピンの裁判に関わった証人たちの証言によって明らかにされているが、パブがどこにあったのかはわかっていない。また、この頃までにベティー・ミリントン（Betty Millington）と結婚をしていたようだが、年月は不明である。

1734年の秋頃から、肉屋時代から知り合いである鹿泥棒の一党（グレゴリー一三兄弟が中核であったので、グレゴリー・ギャングと呼ばれていた）と行動を共にするようになったのだが、鹿泥棒の逮捕に高額な報奨金が出されるようになり、御料林の番人たちが命がけで鹿泥棒を追うようになるに及んで、鹿泥棒では将来の展望が開けなくなり、この一党は押し込み強盗を働く集団へと変質していった。

その手口は、事前に襲撃すべき適当な家（男たちが外出している家や寂しい場所にある一軒家など）を選んでおいて、武装した一団が静かに接近し、馬屋や納屋にいる使用人を脅して玄関まで案内させ、声をかけさせて、家人がドアを開くのを待つ。ドアが開かれるやいなや、家内に殺到し、家にいる者はすぐに一ヶ所に集められ、縛り上げられる。その間に主人は叩かれたり、熱湯を浴びせられたり、「殺すぞ」と脅されたりして、金や貴重品のありかを白状させられてしまう。1735年2月6日付の『ロンドン・イブニング・ポスト』（*London Evening Post*）によると、エセックス州ラウトン（Loughton）の未亡人は、金のありかを教えないので、暖炉の火にかけられたようである。また、ローレンスという老人は、尻を叩かれ、ピストルで頭を殴られたうえに、頭からやかんの湯をかけられたという話も残っている。

ターピンを含む強盗団は、エセックス州やロンドン近郊を3ヶ月以上荒らしまわり、エセックス・ギャングとして恐れられるようになったが、派手な悪事は長続きしなかった。1735年2月11日の官報『ロンドン・ガゼット』（*London Gazette*）紙上で、ギャング団のメンバー5名の人相および彼らの騎

乗する馬に関する情報が公開され、同時に、ギャング団の一員を逮捕した者には50ポンドの報奨金が下賜されることも発表された。ターピンに関しては、この時点ではまだ名前は知られてないが、「疱瘡の痕で顔が醜くなった中背の男」として紹介されている。同日、馬から足が付いて、フィーラー（Wheeler）、ソーンダース（Saunders）、フィールダー（Fielder）の3名が、ブルームズベリー地区のキング・ストリートのパブで飲んでいるところを発見され、乱闘の末に捕縛された。取調べに際して、フィーラーが、自分の訴追を免れるために、仲間を裏切り、共犯者たちの情報を漏らしたせいで、2月18-22日付の『ロンドン・ガゼット』紙上で、グレゴリー・ギャングの主力メンバーの氏名、人相、服装、住所などが公表された。ジョセフ・ローズ（Joseph Rose）、サミュエル・グレゴリー（Samuel Gregory）、トマス・ローデン（Thomas Rawden）、ハーバート・ヘインズ（Herbert Hains）、ハンフリー・ウォーカー（Humphrey Walker）といった面々に加えて、リチャード・ターピンの詳細も紹介された。

リチャード・ターピン：職業は肉屋、背が高く澁刺として血色のよい男。26歳。身長は約5フィート・9インチ。疱瘡の痕がよく目立つ顔。少し前にはホワイトチャペル地区に住んでいたが、最近ではウエストミンスター地区のミルバンク付近に投宿。青ねずみ色のコートを着用し、軽くて着用していると感じさせぬような鬘を使用。

やはり、各メンバーの逮捕に50ポンドの報奨金が下賜されることも、同時に報じられた。ターピンは、この時点で初めて官憲から追われる身となり、以後、約4年間、サバイバルを続けていくことになる。

フィーラーによる情報提供の効果は絶大で、翌週には、ローズ、ウォーカーが逮捕された。当局に取り押さえられたメンバーはすべて 司法取引をしたフィーラーを除いて オールド・ベイリー（Old Bailey、中央刑事裁判所）で有罪判決を受け、タイバーン（Tyburn）で処刑された。但し、ウォーカーだけは、処刑当日の朝に獄死したのであったが、首領格のサミュエル・グレゴリーも、危険が身に迫ってきているのを自覚して、弟のジェレミーと

一緒に大陸へ逃亡しようと図る。しかし、渡航費が支払えないため、4月7日にサリー州でジョン・オズボーン卿を襲って必要な資金の調達を試みたのだが、この追剥ぎ行為が仇となり、2日後、両者ともハンプシャー州で捕縛された。弟は捕物の際に受けた傷が原因となって死んでしまったが、兄サミュエルの方はウィンチェスター監獄に投獄され、やはりオールド・ベイリーで有罪宣告を受けた後、6月4日にタイバーンの露と消えた。

### III. 追剥ぎターピン（相棒マッシュュー・キングの死まで）

仲間の大半を失い、自身の人相書が出回ってしまったのだから、ターピンの方も、安閑としてはいられない。追剥ぎ稼業に活路を見出して、懸命の生き残りを図る。1735年の夏は、ギャング団の残党ローデンと組んで、ケント州やサリー州で追剥ぎ行為を繰り返す。が、追われる身の二人が行動を共にするのは得策でないと考えたのか、クリスマス頃までにコンビを解消し、ターピンはほとぼりがさめるまでオランダへ渡って、数ヶ月間逃亡生活を続けることになる。ターピンがオランダから送った二通の手紙が、捜査当局からの検閲を受け、ターピンとその妻が接触するのを阻止するために、妻を拘束する事件が発生しているので、オランダ逃亡説には十分な根拠がある (Barlow, 256-262)。

ターピンは、遅くとも1737年2月にはイギリスに舞い戻っていて、マッシュュー・キング (Matthew King) やスティーブン・ポッター (Stephen Potter) という新しい相棒と組んで、エピングの森の洞穴を根城にして、エセックス州やレスター州で追剥ぎ行為を繰り返していた。「チャップブック」や「ニューゲート・カレンダー」類、あるいは、19世紀の「ペニー・ドレッドフルズ」(Penny Dreadfuls)<sup>2</sup> の読者にとっては、マッシュュー・キングよりも、トム・キングの名の方がよく知られているのであろうが、当時の新聞や公判録を見る限り、ターピンの相棒のファースト・ネームはマッシュューとなっている。ターピンがケンブリッジ街道で金品を奪おうとした相手が、この追剥ぎのキングであって、ターピンのことをよく知っているキングが、「仲間同士で争ってどうするんだ。おい、ターピン、貴様は俺のことを知らなくとも、俺は貴様のことは知ってるぜ。喜んで相棒になってやるぜ」と言い放った

(Bayes, 14) という、二人の出会いのエピソードは有名である。<sup>3</sup>

1737年4月30日、ターピン、キング、ポッターの3人は、レイトンストーン (Leytonstone、エピングの森周辺にある村) の宿屋グリーン・マンの近くで、ホワイトストッキング号という競走馬を盗み出した。馬主メジャーは、グリーン・マンの亭主ベイズに相談し、ターピンたちの犯行と知らされる。メジャーとベイズが広告を出し、懸命に調査したのが功を奏して、ホワイトチャペル地区のレッド・ライオン亭に競走馬が預けられていることが判明する。5月1日の夜、メジャーとベイズは仲間を引き連れて、レッド・ライオン亭に急行し、盗まれた競走馬を同定するが、夜も更けていたので、翌朝、犯人たちがその馬を引き取りにくるのを待つことにした。ターピンたちの方も用心していて、最も警備が手薄そうな夜明け前にレッド・ライオン亭へ赴くこととし、直接競走馬を引き取る役目は、マッシュューの弟ジョン・キングに押し付けられた。そのジョンは、待ち伏せていたメジャーやベイズに捕まってしまい、その際に弟を救出にきたマッシュューも乱闘に巻き込まれ、胸を撃たれて、意識不明となり、逮捕の後、(クラークンウェル監獄の) ニュー・プリズンに収容された。

この場面に関しては、「ニューゲート・カレンダー」などを通して伝えられている話が、事実とかなり食い違っているので、少し詳しく見ておく必要がある。従来定説によると、ベイズに捕まりそうになっているマッシュューが、「ディック！こいつを撃ってくれ。でないと捕まってしまう」と言ったのに呼応して、馬上から発砲したターピンの弾丸はベイズではなく、隣にいたマッシュューに当たり、「ディック、貴様は俺を撃ったな」とマッシュューが悲痛な叫びをあげているにもかかわらず、ターピンはこれに耳を貸すことなく、全速力でその場から立ち去ったことになっている (Bayes, 18)。確かに、5月7日付の『カントリー・ジャーナル』(Country Journal) は、発砲者はターピンと報じている。しかし、『ポリティカル・ステート』(Political State、1-6月付) にも掲載されたように、6月頃までには、「マッシュューを撃ったのはベイズである」ことが明らかになっていたのだ。おそらく、ベイズは、自らの発砲を否定し、「発砲者はターピンである」と吹聴することによって、マッシュューの心に「ターピンが裏切った」という印象を植え付け、マッシュ

一の口を割らせて、ターピンやポッターに関する情報を入手しようとしたのであろう。破産者でもあったベイズは、ターピン逮捕に伴う報奨金が喉から手が出るほど欲しかったであろうから、このような拳に出たのも不思議ではない。また、このベイズが、処刑直後に出版されたターピン伝の口述者だったのだから、今日までに出版されたほとんどすべてのターピン伝の種本には、客観性、公平性の点で大きな問題があったと言っても過言ではあるまい。「マッシュー殺し」は体よく、ターピンに押し付けられ、後世に定着してしまったのであった。

ベイズの思惑通り、マッシューは、ターピンやポッターに裏切られたと思って、尋問に答えられる程度まで体力が回復すると、ターピンやポッターと共謀して馬主メジャーからメスの競走馬と現金を盗んだことや、ターピンやポッターのアジトなどを自白してしまう。すぐに捜索隊が差し向けられ、マッシューが告白した翌日（5月4日早朝）にポッターは逮捕される。ターピンの方も二度ほど捕まりそうになるが、何とか逃走し、5月4日の夕刻までには、エピングの森にたどり着き、ピクピクしながら潜伏し続ける。他方、マッシュー・キングは、射撃されたとき受けた傷が致命傷となり、5月19日に獄死した。

#### IV. ヨーク州での潜伏生活から逮捕まで

5月4日の夕刻、ターピンに転機をもたらす事件が発生した。トムソンという森番の手下、トマス・モリス（Thomas Morris）が、エピングの森のある場所でターピンを偶然発見し、民家へ武器を借りに行き、行商人を証人として同行させて、ターピン逮捕に向かう。しかし、ターピンたちがねぐらとして使っていた洞穴の入り口近くでターピンに発見され、逆に射殺されてしまう。ターピンにとっては、身を守るための止むを得ない処置だったのだろうが、世間のターピンへの風当たりは一層厳しいものとなった。これまでに押し込み強盗や追剥ぎとして追われながらも、ターピンが逃げ延びることができたのは、彼のシンパ、彼を匿い逃走の手助けをしてくれる宿屋、パブ、故買屋などがあったからだ。そのターピンに「殺人者」というタイトルが付くとなると、今までのように行かなくなる。おまけに、『ロンドン・イブニ

ング・ポスト』(London Evening Post、5月4-5日付)によると、まもなく、ターピンを逮捕した者に200ポンドの報奨金を出すという国王の布告が発せられようとしていた。200ポンドと言えば大金で、これまでのシンパの中からもターピンを売る輩が出てこないとも限らない。ここに、ターピンの進退が窮まった。もはや、相棒と派手に悪事をやらかすことなど許されなくなった。官憲の力の及ばぬ遠隔地で別人になりすまして、単独で行動する以外に生き延びる道はなくなってしまったのだ。

予想に違わず、「トマス・モリス殺しの犯人にして、数多くの強盗、追剥ぎ行為の実行犯であるディック・ターピンを逮捕した者に200ポンドの報奨金を出す」という国王の布告は1737年6月25日付の官報『ロンドン・ガゼット』に掲載された。その際に、ターピンに関する以下のような詳細な人相書も添えられた。

このターピンなる者、エセックス州サクステッド(Thacksted)生まれで、年齢は30歳くらい。職業は肉屋。身長5フィート9インチ、顔は浅黒く、疱瘡の痕がかなりはっきり見受けられる。頬骨は広く、顔は顎にむかうにつれて細くなり、小顔。姿勢がよく肩幅が広い。

サクステッドという生誕地は間違っているが、人相に関する情報は大体正確であるらしい。ターピンはあまり男前ではなかったようだ。この人相書が出回って以降、ターピンがロンドン周辺で生き残る芽は完全に断たれたと言ってよい。が、当時は、治安判事間の連絡が皆無であり、いわゆる全国紙もなかったので、イギリス国内でも遠隔地へ活動拠点を移してしまえば、逃げ延びることは十分可能だった。<sup>4</sup> 国王の布告が出された後、ターピンに関する新聞報道はほとんどなくなってしまったことから明らかなように、これ以後約1年3ヶ月の間、ターピンに関する消息は途絶えてしまう。

逮捕後の取り調べ等で明らかになったように、この間、ターピンは追剥ぎ稼業に見切りをつけ、自分の面が割れる心配のないヨーク州東部への移住を決意し、実行したようだ。<sup>5</sup> ヨーク州やその隣のリンカーン州には、大陸への連絡船が出ている港もあり、将来再度オランダへの出国を余儀なくされた



ときの逃走ルートを確認するという意味合いもあったようだ。1737年6月から10月まで、馬商人のジョン・パーマー（John Palmer）を名乗って、ヨーク州の南端、ハンバー川のほとりのブラフ（Brough）という集落のフェリー・ハウス・インに逗留していた。このときターピンが名乗ったパーマーという姓が、母親の旧姓（Parminter）を簡略化したものであったことは、ヘムステッドの教区教会に残っているターピンの両親の結婚記録から窺い知ることができる。

この時期のターピンは、しばしば対岸のリンカーン州へ赴いては馬を盗み出し、ヨーク州側へ連れ帰っては売りさばっていたらしい。10月になると、フェリー・ハウス・インを引き払い、近隣のウェルトン（Welton）に拠点を移すとともに、リンカーン州ロング・サットン（Long Sutton）にも拠点を設けた。ロング・サUTTONはケンブリッジ州やノーフォーク州にも近い交通至便の地で、エセックス州の実家へ帰るにも好都合であったからであろう。しかし、新拠点構築の主目的は、ロング・サUTTON周辺で調達した馬をウェルトンや市の立つノース・ケープ（North Cave）で売ることであったのだろう。とにかく、約1年間、馬を商う商人を自称し、紳士然とした振る舞いをして、お酒を飲んだり、狩に出かけたりして土地の人々とも交際し、別人になりますことに成功していたようである。

1738年7月頃からこの新生活にも暗雲が立ちこめ始める。同月、エッセクス州の生家を訪問したとき父のために残していった馬が、リンカーン州の牧師から盗んだ馬であると判明し、ターピンの父はチェルムスフォード（Chelmsford）監獄へ収監されてしまう。翌8月には、馬泥棒よりも輸送や処分に手間がかかり、足が付きやすい羊泥棒にも手を出したのが仇となって、ヨーク州ビヴァリー（Beverley）で羊泥棒の容疑で逮捕され、取調べを受ける。幸い、ターピンは警吏の目をごまかして逃走するのだが、その際にトマス・クリーシー（Thomas Creasy）なる人物が所有する馬3頭を盗み出す（彼の有罪、処刑の根拠となった犯罪）。何とかウェルトンまで逃げ戻ったターピンには、危険を承知でこのまま馬泥棒を続けるか、街道筋で追剥ぎを働くかしか、選択肢がなかった。

9月12日に、自分が置いていった馬が原因で父が収監されたということ

報道で知って、ショックを受け、かなりやけ気味になっていたのかもしれない。同月末に、金に困って、クリーシーから盗んだ馬3頭のうちの牝馬と子馬を市場ではなく、近隣に住むドーソン大尉 (Captain Dawson) に売却したのも軽率だった。10月2日には、さらに無分別な事件を引き起こしてしまう。朝の狩猟から帰ってきたターピンは、ブラフ在住の牛飼いフランシス・ホール (Francis Hall) が飼っていた家禽を訳もなく撃ち殺した。この残虐な殺戮行為を目撃した、同じくブラフ在住のジョン・ロビンソン (John Robinson) が見咎めたところ、ターピンは詫びるどころか、逆に怒りを爆発させて、「黙らないと、撃つぞ」と脅しをかけてしまう (Barlow, 344)。翌日、被害を受けたホールが直ちに訴え出たため、ターピンはビヴァリーの治安判事の前に連行される。取調べを受けたターピンは身元保証人を呼ぶことを求められるのだが、偽名を使って逃亡中の身の上では見つけることはできず、ビヴァリーの矯正院へ送られてしまう。ブラフやウェルトンの住民たちから、「しばしば、ジョン・パーマーはリンカーン州へ行っては、金と馬を持ち帰っていた」という情報を聞き出していた治安判事は、ターピン本人からも「ウェルトン滞在以前にロング・サットンで暮らしていた」という情報を得たので、さっそく、リンカーン州ロング・サットンへ問い合わせてみた。すると、パーマーが羊泥棒で逮捕された後に逃走したことや、パーマーには別の馬泥棒の嫌疑 (ターピンが父に贈った馬に関して) もかけられていることが判明したので、ターピンは10月16日にヨーク監獄へ移送された。

11月の始め頃、ドーソン大尉がターピンから購入した牝馬と子馬およびターピンがビヴァリーの矯正院に送られるまで騎乗していた馬を調査するために、リンカーン州から2名の係官が派遣されてきた。調査の結果、これら3頭の馬はトマス・クリーシー所有の馬であることがわかった。馬泥棒の証拠が確定した以上、身元保証人の有無はもはや関係なくなり、ターピンが釈放される見込みはなくなった。ターピンは、馬泥棒という重罪 ロング・サットンで犯した羊泥棒や逃亡罪よりもはるかに重罪で、正式に告発されることになり、ジョン・パーマーという偽名のまま3月のヨーク巡回裁判で裁かれることが決定した。

## V. 正体発覚の経緯と裁判

1739年2月以降にターピンが父親（集団脱獄事件の阻止に貢献して2月に釈放されていた）や兄弟とやり取りをしたという計4通の手紙は、処刑後に刊行された『悪名高き追剥ぎ、リチャード・ターピンの公判録』やその海賊版である『実説リチャード・ターピンの生涯』（*Genuine History of the Life of Richard Turpin*）に掲載されている。兄や父の力を借りて何とか局面打開を図ろうとするターピンからの要請を受けて、父が有力者に息子の助命嘆願工作を行ったのだが不調に終わったというのが大体の内容である。しかし、これらの手紙の中で言及されている有力者の正体が不明であり、それぞれの手紙の日付もいい加減に付けられ、何よりも、内容が家族でなくても書けるようなありきたりなものであるので、パーロウはすべて偽作であろうと推断している（Barlow, 355-359）。

しかしながら、ターピンが2月の第1週か、遅くとも2週目に、ヘムステッドの実家にいる義兄（姉マリアの夫）ポンパドール・リヴァノール（Pompadour Rivernall）に金の無心をする手紙を送ったことは、ジェームズ・スミス（James Smith）という証人が書いたと思われる手紙によって確認されている。そして、この義兄への手紙が決め手になって、ジョン・パーマーがディック・ターピンであることが証明されたのだ。定説では、リヴァノールが「ヨークに知人はいない」と言って、受け取り（郵便料金の支払い）を拒否したため、手紙は郵便局に戻され、その郵便局に、たまたまターピンに綴り方を教えた教師ジェームズ・スミスが居合わせたので、その筆跡から、ヨーク監獄に拘留されていた手紙の差出人がターピンであることが見破られたことになっている。<sup>6</sup> スミスはさっそく、治安判事にこのことを報告し、後にヨーク監獄へ自ら出向いてパーマーを名乗る囚人の正体を突き止めたのである。

しかし、トマス・キル（Thomas Kyll）という速記者が書き残したターピンの裁判記録を検討すると、この定説の矛盾点が見えてくる。裁判でのスミスの証言によると、「自分は、確かにターピンに字を教えた。大体9ヶ月ほど彼と一緒にいたと思う。彼の義兄が受け取りを拒否した手紙を郵便局で見

たときに、宛名書きを一目見て、ターピンの筆跡だとわかったので、治安判事に届け出、治安判事が開封して、ヨーク監獄から来た手紙と知った（Kyll, 12）とあるが、自分が教師であるとは言ってない。また別のところで、「自分が収税吏になったとき、ターピンは11歳か12歳で、肉屋をしていた父親を手伝っていた」（Kyll, 13）とも証言している。つまり、スミスは、ターピンの教師ではなく、村の学校の先輩であり、上級生の資格で綴り方を教えた程度なのだ。このようなスミスに筆跡鑑定をする能力があったと言えるだろうか。また、1739年3月31日付の『レイズ・ウィークリー・ジャーナル』（*Reid's Weekly Journal*）には、「監獄で金に困ったターピンは、仲間の囚人に手紙を書かせて、自ら署名することを余儀なくされた」という記事が出ている。署名以外のすべてが代筆であったのなら、スミスがターピンの筆跡を記憶していたという話は、まったく信用するに値しなくなってしまう。

ターピンを逮捕すれば報奨金が貰えるという国王による布告が二度までも出されていたのだから、その実家には常に官憲の目が光っており、隣人たちも注意して見ていたはずである。その家から、受け取り拒否すなわち料金不払いの手紙が舞い戻ってきたのだから、郵便局に居合わせた者が大いに関心を寄せたのも無理はない。1711年の郵便法<sup>7</sup>によると、この種の手紙は令状なしで開封できるのだから、郵便局長の了解が得られさえすれば、中身を読むことができたはずだ（実際、ターピンが実家へ金の無心をした手紙は数通捕捉されている）。その手紙の差出人が馬泥棒でヨーク監獄に収監されており、義兄に金の無心をしてきていると知れば、察しがつかぬほうがおかしい。おまけに、手紙の差出人は、ターピンの母親の旧姓を偽名として使っていたのだから、この時点で、「差出人はターピンである」とスミスが見当をつけたとしても不思議ではない。その後、スミスはエセックス州の治安判事たちの要請を受けて、自らヨーク監獄へ赴き、複数の囚人の中から難なくターピンを見つけ出すことに成功し、裁判で「パーマーの正体はターピンである」（Kyll, 11）と証言した結果、見事に報奨金の一部を射止めたのである。

3月22日にターピンの裁判が行われた。ターピンは、「3頭の馬は購入したものであり、明日になれば証人が来る」と抵抗したが、クリーシーの馬の特徴に関する証言、ドーソン大尉の「ターピンから馬を買った」という証言、

および、ドーソンが馬を預けていたリチャード・グラスビー (Richard Grassby) の「自分が預かっていた馬はクリーシーが申し立てている馬と同一である」という三つの有力証言の前では、ターピンの主張など問題にされなかった。おまけに、幼い頃からターピンを知っているジェームズ・スミスとエドワード・ソード (Edward Sward) が、「被告はターピン本人である」(Kyll, 15) と証言したために、ついにターピンも「自分が偽名を使っていた」ことを認めざるをえなくなり、万事休したのであった。陪審員は有罪を宣告し、裁判官は極刑を言い渡した。

## VI. 処刑前後の顛末

死刑宣告を受けた後のターピンの様子は、『実説リチャード・ターピンの生涯』に掲載された「ヨーク監獄におけるターピンの振る舞い」という記事が伝えている。この記事も捏造されたものであるという可能性は捨てきれないのであるが、参考にはなるだろう。裁判で馬泥棒のジョン・パーマーが悪名高き追剥ぎディック・ターピンであることが明らかにされると、噂は全国に広まり、各地から、毎日多くの人々がヨーク監獄へターピンを見物しにやってくる。その際、話題の中心になったのは、もちろん、「ここにいるターピンが本物かどうか」であった。この件に関して、ターピンの豪胆な性格 - あるいは、ふざけた性格 を物語る逸話が残っている。ある日、ターピンのことを知っていると呼ぶ若者がやってきて、ターピンを慎重に検分し、看守に「この男がターピンではないことに半ギニー賭けてやる」と言ったところ、ターピンが聞きつけて、看守の耳元で「奴に賭けさせてやれ。(こちらの)賭け金は俺とおまえで折半しようぜ」と語ったという。獄中のターピンは教誨師の忠告に耳を貸すことも、良心の呵責の一端を見せることも一切なく、見物人たちと酒を飲み、冗談を飛ばして、陽気に振舞っていたようである。

また、『悪名高き追剥ぎ、リチャード・ターピンの公判録』には、処刑日である4月7日土曜日の朝、ターピンは5人の男に3ポンド10シリングの金を渡して、泣き屋として雇い、揃いの喪章と揃いの手袋を身に付けて、刑場へと運ばれる荷馬車の後ろに付き従うように命じたという話が紹介されてい

るが、こちらの方も真偽の程は定かではない。処刑の様子は、4月10日付『ヨーク新報』(*York Courant*)紙上で、大体以下のように報じられている。同じく馬泥棒で極刑を言い渡されたジョン・ステッド(John Stead)とともに、ネイヴズマイア(Knavesmire)刑場へと移送されたターピンは、道中でも、驚くほど落ち着き払っていて、見物人たちにお辞儀をする余裕があった。処刑台の梯子段も自分で登り、震える右脚を踏みつける余裕を見せて、臆することなくあたりを見回し、死刑執行人に二言、三言、言葉をかけた後に、自分で梯子から飛び降り、この世を去った。右脚の震えが心の動揺のせいなのか酔いのせいなのかは、今となってはわからない。ただ、最期まで冷静さ、気丈さを保ち続け、颯爽と死んでいったのは、さすがであった。

遺体の始末には後日談がある。遺体は、処刑日の午後3時に絞首台から降ろされ、翌朝10時までキャッスル・ゲートのブルー・ボア亭で保管された後、一旦はセント・ジョージ教会の墓地に埋葬された。その際に、墓穴は深く掘られ、ターピンが泣き屋として雇った男たちが遺体を守るために、できる限りのことをしたのだが、2日後の火曜日の午前3時に数名の者が墓を暴いて、遺体を運び去ってしまった。ターピンの遺体が解剖に回されるのではないかと心配になった群衆は、懸命の搜索の末、遺体を取り返した。彼らは、ターピンの遺体を、裸のまま藁をかぶせて戸板に載せ、意気揚揚と街中を練り歩き、消石灰のたっぷり入った棺に安置して、元の墓に埋め戻したという。群衆がターピンの遺体を守ったのは、必ずしも後のターピン人気と結びつくものではない。当時、公開処刑は民衆にとっての娯楽の一つであり、刑場で死んでいく者には、勇敢に格好よく死んでいくことが期待され、今わの際に醜態を晒す者は逆に軽蔑の対象となった。ターピンの「カッコいい死に方」が群衆を味方に付けた原動力であったのだろう。

これまで述べてきたのが、ディック・ターピンの実像であって、おそらく、これまで「ニューゲート・カレンダー」類、「チャップブック」類、「ペニー・ドレッドフルズ」あるいは映画やテレビ等で紹介されてきた「伝説やロマンに富んだ快男児」というイメージからは、程遠い存在であったと言えよう。チャールズ・マッカイ(Charles MacKay)は、『驚くべき民衆の錯誤と狂気』(*Extraordinary Popular Delusions & the Madness of Crowds*)の中で、泥

棒が英雄に変わるための必要条件として、寛大さ 礼儀正しさ 献身的な勇敢さの3つをあげている (MacKay, 662) が、残念ながら、ターピンに関して評価できる点は、サバイバルするための嗅覚が抜群で、その逮捕に初めて報奨金が懸けられて以来、3年8ヶ月間逃げとおした点に尽きるのである。「金持ちから奪い貧民に分け与える」といった義賊めいた話や仲間を救うために一身を投げ打つといった話、あるいは、クロード・デュバル (Claude Duval) のような追剥ぎを仕掛けた相手の連れの女性とダンスするといった小粋な話は、史実を見る限り、ターピンにはない。颯爽たる「街道の紳士」どころか、馬泥棒で死刑になった、卑しい悪党に過ぎなかったのだ。

## 注

- 1 但し、エインズワースが小説化して有名になった「ターピンのヨークへの馬駆け伝説」については、別の所で詳細に論じる予定であるので、本研究ノートでは言及しない。
- 2 当時、大都市の労働者、工員、奉公人などを相手に煽情的な話を、毎週1ペンスという低価格で売り出していた読み物。読者に受けて売上を伸ばすことが最大の目的であったので、場当たりの興奮や刺激を売りにすることが多く、筋に辻褃の合わないところがあったり、途中で中心人物が変わったりすることもしばしばで、完成された芸術作品であるとは言いがたい。しかし、当時の労働者層や青年層が何を嗜好していたのかを知るための恰好の資料である。
- 3 このエピソードは以後、ほとんどすべての「ニューゲート・カレンダー」に掲載されている。アッシュとデイは、ターピンの相棒のファースト・ネームがトムでないことを指摘した点までは正しいが、ロバート (ポップ) としているのは間違い (Ash & Day, 41)。また、彼らはこの出会いを1736年2月の出来事としている (Ash & Day, 40) が、これもベイズの口述を鵜呑みしていることを示す証左となる。ベイズは、知り合った直後のターピンとキングがアジトに定めたエピングの森へ、ターピンの妻が食料を持ち運んでいたと口述しているが、ちょうどこの時期はターピンの帰国前後に当たり、ターピンの妻は当局に拘束されていたから、1736年2月説は成り立たない (Barlow, 257)。
- 4 治安判事を中心とした当時の犯罪捜査の限界に関しては、拙稿「ポリス・ガゼット創刊の意義 - フィールディング兄弟の広報戦略と犯罪捜査 -」(日本ジョンソン協会編、『十八世紀イギリス文学研究第2号 - 文学と社会の諸相』[東京: 開拓社、2002]、pp.214-232) を参照願いたい。

5 ターピンがヨーク州やリンカーン州に拠点を移した時期に関しては、ベイズ以来エインズワースに至るまで一貫して、レッド・ライオン亭での乱闘で、キングを撃った直後とされているが、そちらの説に従うと、ヨーク州まで逃走した後すぐにエピングの森に舞い戻ってトマス・モリスを殺害したことになる。行動の合理性や移動時間などから判断すると、モリス殺害後に拠点を移したと考える方が説得力がある。

6 例えば、*The Tyburn Chronicle* (London: J. Cooke, 1768), III, p.116。

7 1711年の郵便法と検閲に関しては、拙稿「1711年の郵便法と怪盗ターピン」(『日本ジョンソン協会年報』No. 26 [日本ジョンソン協会、2002], pp.12-16)を参照したい。

### 参考文献

- [Anon.] *Dick Turpin: Highwayman*. York: York Castle Museum, 1986.
- [Anon.] *The Genuine History of the Life of Richard Turpin, the noted Highwayman*. 3rd ed. London: J. Standen, 1739.
- [Anon.] *Tyburn Chronicle: or, Villainy Display'd in All Its Branches*. 4vols. London: J. Cooke, 1768.
- Ainsworth, William Harrison. *Rookwood*. London: Richard Bentley, 1834; rpt. London: George Routledge, 1882.
- Anglo, Michael. *Penny Dreadfuls and Other Victorian Horrors*. London: Jupiter, 1977.
- Ash, Arty & Julius E. Day. *Immortal Turpin*. London: Staples Press, 1948.
- Barlow, Derek. *Dick Turpin and the Gregory Gang*. Chichester, Sussex: Phillimore, 1973.
- Bayes, Richard. "The Life of Richard Turpin." *The Trial of the Notorious Highwayman Richard Turpin*. 4th ed. York: Ward and Chandler, 1739.
- Billett, Michael. *Highwaymen and Outlaws*. London: Arms & Armour, 1997.
- Carpenter Kevin. *Penny Dreadfuls and Comics*. London: Victoria and Albert Museum, 1983.
- Ellis, S. M. *William Harrison Ainsworth and his Friends*. 2vols. London: John Lane the Bodley Head, 1911.
- Harper, Charles G. *Half Hours with the Highwaymen*. 2vols. London: Chapman & Hall, 1908.
- Hibbert, Christopher. *Highwaymen*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1967.
- Hollingsworth, Keith. *The Newgate Novel 1830-1847*. Detroit: Wayne State University Press, 1963.
- Hudson, Derek. "Dick Turpin: Fact and Legend." *The Forgotten King and Other Essays*.



- London: Constable, 1960.
- Jackson, William. *The New and Complete Newgate Calendar*. 6vols. London: Alexander Hogg, 1794.
- Kyll, Thomas. "The Trial of John Palmer, alias Paumer, alias Richard Turpin." *The Trial of the Notorious Highwayman Richard Turpin*. 4th ed. York: Ward and Chandler, 1739.
- MacKay, Charles. *Extraordinary Popular Delusions & the Madness of Crowds*. London: Richard Bentley, 1841; 1852; rpt. New York: Crown Trade Paperback, 1980.
- Maxwell, Gordon S. *Highwayman's Heath*. Hounslow: Thomason Limited, 1935.
- Miles, Henry Downes. *Dick Turpin*. 4th ed. London: William Mark Clark, ca.1845.
- Pringle, Patrick. *Stand and Deliver: The Story of the Highwaymen*. London: Museum Press, 1951.
- Rayner, J. L. and G. T. Crook. Eds. *The Complete Newgate Calendar*. 5vols. London: T. Navarre Society, 1926; rpt. Kyoto: Rinsen, 1983.
- Seccomb, Thomas. "Richard Turpin." *Essex Review* Vol. XI. January, 1902.
- \_\_\_\_\_, "Richard Turpin II." *Essex Review* Vol. XI. April, 1902.
- Stephen, Sir Leslie and Sir Sidney Leed. Eds. *Dictionary of National Biography*. Oxford: Oxford University Press, 1917.
- Turner, E. S. *Boys Will Be Boys*. New revised ed. London: Michael Joseph, 1975.